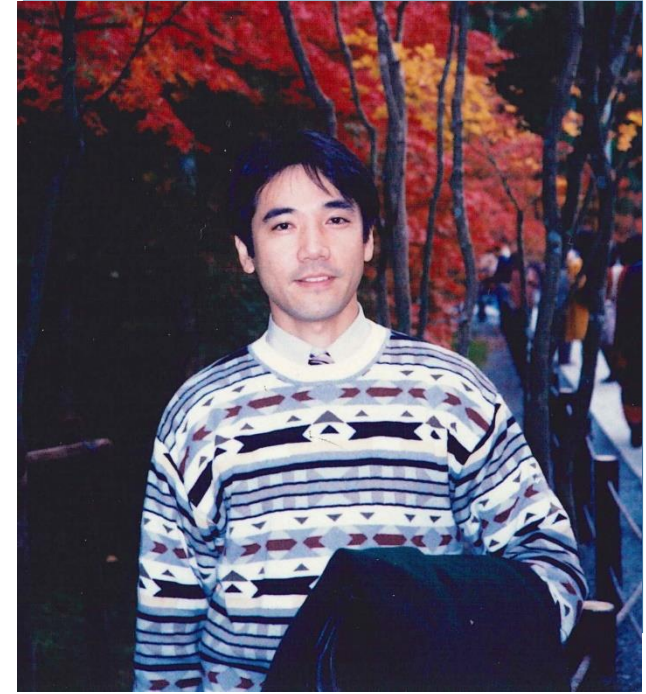


# 医師会長にACP、人生会議について聞いてみました

**先生は外科医ですが、人生会議について、何かエピソードがおありでしょうか。**

大阪の50歳代の女性で、大学病院でがんの手術を受けたものの再発し、食事ができなくなり、胃婁と24時間の持続点滴を行っていたが、終末期には佐用に戻り両親達と過ごされた方がいます。2人の息子さんが、交替で大阪から看病に訪れ、当院では訪問看護と往診でサポートしましたが、チューブが外れ、点滴の詰まりで、夜中や明け方にも対応しました。一方で、ご家族と一緒にドライブに出かけるなど、楽しい時間も過ごされました。最期には胸水や腹水が溜まり、呼吸困難のため病院に入院されました。鎮痛治療を行い、会話はできたものの、ほとんど眠るような状態でした。本人は最後まで生きる希望を持ち続けていましたが、2ヶ月の闘病の末、お亡くなりになりました。希望する終末期をささえる側の体制整備も必要です。



**今、地域で患者さんに人生会議についてお伝えされたいことはどんなことですか。**

誰しもだんだん最後の時に近づいています。残された人生の時間をどう過ごしたらいいか考えてみましょう。いつか誰もが、自分自身だけでは何もできなくなってくるので、家族や介護してくださるような方々の援助が必要です。かかりつけの先生と相談し、将来の病状の変化等、適切な医療、ケアのアドバイスを受けながら、家族や信頼できる方々を準備していくのが人生会議です。すべてを決めておかなければ、ということではありませんし、先日思ったことと今日思うことが違うならそれを伝えて共有しておくことが人生会議です。みんな穏やかな気持ちでいられるように、そのために身近な人と自分のこれからを話してみませんか。